

文教研の 葉 しおり

2014. 春
発行・編集
河合文化教育研究所

本部事務局
名古屋市千種区今池2-110 Gビル3F
問い合わせ先 文教研・東京
豊島区南池袋2-49-7 池袋パークビル5F
TEL 03-6811-5517 FAX 03-5958-1241

河合塾で 新しくスタートするみなさんへ

み なさんに「文教研の葉^{しおり}」をお届けします。これは昨年の秋に発行したものの再版で、河合文化教育研究所元主任研究員の故谷川道雄先生の特集を二・三面に組み、一・四面で文教研の主任研究員・特別研究員の紹介をしています。なぜ再版なのかというと、この春、河合塾で新しいスタートを切るみなさんにとって、この「文教研の葉」が一步を踏み出す「葉＝道しるべ」になると思うからです。

谷 川道雄先生は中国中世史がご専門で、中国史研究が人間存在の普遍性につながる原理を求めるものでありたいと望んでいらっしゃいました。魏晉南北朝の史書を丹念に読み続ける中で、当時の人びとの生き方に触れて感動し、階級や種族や、その位置は異なっても心が通うのは「同じ人間」であるからだとの想いから、研究人生が出發したといえます。今日の歴史研究で制度史の研究がやたらと多いのは人間を外から規制するメカニズムを社会の本質と考えているからだ、そうでなく社会の中で生きる人間に目を向けることで、歴史は単なる過去のものでなくなり、現代を照らし出すものになるとお考えでした。そして、「私のなすべきことは、自分の位置を変えないことだ。そして世界が人びとの自覚によっていつの日か変わり、人間の氣力をとり戻すのを待つことだ。たとえ人生を終わっても、かなたでそれを待つことだ」とおっしゃっていました。

主 任研究員・特別研究員の木村敏・丹羽健夫・渡辺京二・中川久定・長野敬・牧野剛の6人の先生方の「近況」は、2013年8月にお書きいただき、谷川先生の特集も同様に2013年秋号として編んだものです。どうぞご了解のもとご覧ください。

「葉」 とは、「山道などで木の枝を折って道しるべとすること」＝「道標」です。みなさんはいま、大きな希望と背中合わせのように不安も感じながら歩み出そうとしていることでしょうか。分かれ道に立って判断に迷うこともあるかも知れません。そんな時、長年にわたり研究者としての道を歩んでこられた先生方の言葉が道しるべとなるに違いありません。可能性として進む道はいくつもあり、どこへ向かうのも自由です。河合塾の塾訓は「汝自らを求めよ」です。道に迷いつつも「自ら求めて」、河合塾で何かを得てください。

主任研究員の近況



書くことが
考えることになる
木村 敏

最近、日経新聞に五回連載で私についての記事が載った。「こころの玉手箱」という欄である。あるいはお読みくださった方もおられるかもしれない。若いころドイツへ留学したときに向こうではじめて取得した運転免許証（これには30歳のときの顔写真がついていて、不思議なことに現在でもまだ通用する）とか、ハイデガーから直接に手渡された自筆の献辞の著書とか、そういった思い出の品物の写真が紹介されている。その最終回に、去年この「文教研の葉」にも書いたウォーキングの話が出てきて、行き先の喫茶店が写真入りで紹介されていた。それからというものの、その記事を読んだという人がちよくちよくこの喫茶店を訪れる。先日は浜松からやってきたという人もいたし、京大文学部の名誉教授で私も名前がよく知っている有名な先生も来られた。

しかし夏になるとウォーキングは身にこたえる。リノックでパソコンを背負った重たさではいつ熱中症で倒れるかわからないから、小ぶりのカバンに文庫本それに老眼鏡と筆記用具を入れて出かける。最近持つて歩くのはほとんど、私自身が若いころに出した論文集の文庫版である。西田幾多郎の言葉に「書くことが考えることになる」というのが再体験したく、むかしどんなことを考えていたかを再体験したく、自分の書いた文章に書き込みを入れたり赤鉛筆で熱心に線を引いたりしている。そうすることによって、



日本人の留学
―長州ファイブ―
丹羽 健夫

「日本人の留学」について調査し本を書いているが、「長州ファイブ」の物語が面白い。長州ファイブとは、英国に留学したのち、明治18年に最初の内閣総理大臣となる伊藤博文、外務大臣の井上馨、など明治の重鎮5名のことである。なかでも伊藤、井上は留学以前は意外にも尊皇攘夷派の雄で、高杉晋作ら総勢12名とともに英国公使館の焼き討ちに加担している。それがなぜ英国留学かについては、壮大な攘夷が狙いであったという説がある。つまりたかが一人や二人切り殺しても埒が明かない、黒船を退治するには黒船を以てするしかない。つまり英国で海軍を学び、日本海軍を建設するために英国に向ったのである。

しかし途中で立ち寄った上海で、何百艘という艦船群を見てこれは海軍という末梢的な問題ではない。国力の問題である。文化文明の問題であると開眼したという。つまり文化文明を国にもたらすという目的に志を変えたという。攘夷から開国に、一挙に変身したのである。しかしこのイギリス行きは鎖国の幕

そのときあと一步のところで考えが及ばず文章化できなかった自分の思想が、何十年かの歳月を経てようやく納得できる形にまとまってきたりする。私がいまなんとか形にしたいと思っているのは、この年末にまた東京で開かれる「河合臨床哲学シンポジウム」の講演である。昨年は鷲田清一さんと組み合わせたが、今年の相手は野家啓一さん、この数年私と二人三脚でこのシンポジウムを取りしきってくださった哲学者である。お互いに相手が何を考えてそれをどう表現するか判りすぎるほど判っている。それでも何とかして新味を出して行かなくてはならない。そんなことでせつせつと自分のむかし書いたものを読んでみる。

プロフィール

木村 敏（きむら・びん）
文教研所長・主任研究員
京都大学医学部
専攻：精神医学、精神病理学。医学博士。
京都大学名誉教授。ドイツ精神神経学会およびドイツ現存在分析学会特別会員。
「あいだ」を軸にした独自の自己論で内外に大きな衝撃を与え、近年は環境に相即する主体を核とした生命論を展開中。
1981年第3回シールホルツ賞（ドイツ）、1985年第1回エグネル賞（スイス）、「木村敏著作集」第7巻が2002年度第15回和辻哲郎文化賞受賞、「精神医学から臨床哲学へ」（ミネルヴァ書房）が2010年度毎日出版文化賞受賞。2011年度京都府文化賞特別功労賞を受賞。
著書：「時間と自己」「分裂病と他者」「偶然性の精神病理」「自己・あいだ・時間」「関係としての自己」「生命と現実」ほか多数。「木村敏著作集」全8巻。河合文化教育研究所からも「人と人のあいだの病理」「からだ・こころ・生命」（河合フックレット）、「分裂病の詩と真実」、中村雄二郎氏との共同監修による思想年報「講座生命」全7巻、坂田恵氏との共同監修による臨床哲学シンポジウム「身体・気分・心」「かたまり」と「つくり」野家啓一氏との共同監修による臨床哲学シンポジウム「空間と時間の病理」「自己」と「他者」を刊行。「河合臨床哲学シンポジウム」を主宰し、精神医学と哲学の課題の重要なところをアクチュアルな問題を提出する。

政下では密航であった。露見すれば死を覚悟せねばならない。ロンドンに着いた彼らはロンドン大学のユニバーシティ・カレッジで化学・地学・土木・数理・物理などを学び始める。しかし到着後半年弱のとき、米英仏蘭の四国艦隊による故国長州に対する砲撃と占領の報に接する。長州で攘夷論が大勢を占め、下関海峡を通る外国の船舶を砲撃したことに對する報復である。すでに攘夷の無意味さが骨身に沁み、いた伊藤と井上は、無駄な戦争をやめるよう故国を説得するために日本に向う。
この物語で面白いのは、当時英国までは片道で半年もかかったこと、そして伊藤が現地にはたった五ヶ月ばかりの滞在中で、英語で演説できるほど言葉を吸収したことである。

プロフィール

丹羽健夫（にわ・たけお）
文教研主任研究員
名古屋大学経済学部
名古屋外国語大学客員教授。
1967年より河合塾勤務。以来一貫してカリキュラム作成、生徒指導、教員確保、生徒募集に従事。進学教育本部長、理事として河合塾のみならず、日本の予備校教育の責任を担ってきた。現在は中等・高等教育問題等の出版、高等学校・大学での講演等をこなす。教育の現場から制度まで教育全般について幅広くメッセージの発信を続ける。現在「日本人の留学」を執筆中。著書「愛知の寺子屋」「予備校が教育を救う」「悪問だけの大学入試」「眠られぬ受験生のために」「親子の大学入試（共著）」「星の王子・王女たちの留学物語」（監修）ほか多数。

ほかの予備校にはない河合塾独自の研究所

予備校にはやや異質な感じがする研究所という名称を持つ「河合文化教育研究所」（通称「文教研」）について簡単に紹介します。この研究所は、河合塾で学ぶみなさんに、単に受験勉強だけでなく、もっと広い世界に眼を見開いてほしい、同時に自分の内面を掘り下げて自分の隠れた可能性を見出してほしい、そのための知的刺激を提供したい、という想いのもとに作られたものです。みなさんが存分に自分の感受性と思考力をはぐくむことが、結果として受験への足腰を鍛えるだろう、との強い確信があったので。

一方で、文教研は、著名な思想家や国際的に有名な学者の方々に主任研究員としてお越しいただいています。予備校の中の研究所という特別な場所に、大学にはない新鮮な意味を感じて集まってくださった立派な先生方です。この主任研究員の存在が、文教研に文化的・学問的奥行きを与えています。ほかにも、特別研究員や河合塾講師をしながら研究に打ち込んでいく多くのすぐれた研究員がいます。そうした人々の独自の研究と熱意によって、河合文化教育研究所は支えられています。

みなさんが受験勉強と格闘しながら成長している予備校の教育現場と現在の学問研究の最先端とのあいだに生き生きとした往復運動があるところに、ほかの予備校にはない文教研の独自性があります。

文教研がやっていること

文教研では多くの国際シンポジウムを行ってきました。日仏シンポジウム「青年の現在」を皮切りに、日独シンポ「日独文学者の出会い」、北京大学との10年にわたる日中共同学術討論会「アジアの歴史と近代」、さ

河合塾の付属研究機関 河合文化教育研究所《文教研》

文教研のめざすもの

これらの活動を通して、文教研では、さまざまなほころびが出てきた近代科学や近代教育の枠組みそのものを、みなさんと一緒にもう一度根底的に問い直そうとしています。とくに「3・11」における近代科学の象徴としての福島第一原発の爆発事故以後、近代の諸価値と原理がいつそう丁寧に考え直されなければならなくなっています。文教研では、こうした大きな問題をも受けとめて、みなさんと考えていきたいと思っています。また、東アジアの領土問題がせりあがってきた中、中国や韓国の研究者や若い人々と東アジアの近代の歴史問題や教育問題を互いに語りあい、相互理解を深めることを通して、近代の国民国家を超えた東アジアの公共空間をどう創るかということをも考えていきたいと思っています。

この「文教研の葉」は、こうした文教研の願いと意図と活動を、塾生のみなさんに紹介するために発行するものです。

特集 谷川道雄先生

河合文化教育研究所主任研究員の谷川道雄先生が、去る6月7日にお亡くなりになりました。87歳でした。

谷川先生は、一九九四年に河合文化教育研究所に主任研究員としておいでくださいました。ご専門は中国中世史で、この分野の第一人者でしたが、そのご自分の中国史の研究を軸に、文教研では東アジア史や「アジアの歴史と近代」をテーマにした数多くのシンポジウムに精力的に臨まれました。また、研究会の主宰や顧問の任にも就かれてみえなさんを指導され、研究成果の発表やその記録の執筆にもご尽力されました。最近には特に現代中国農民運動に深い関心を寄せて、中国農民の真摯な姿に触発されるとおっしゃって、熱意のこもったご研究に邁進されていました。



「中国史研究が単に特定の文化世界を分析するに止まらず、そこから人間存在の普遍性につながる原理を求めている」と、全人類の未来へ向けた人類普遍の広大な視野に立つて考えておられました。研究に向かう姿勢は粘り強くその精神力は強靱でありながら、ひとには心優しいお人柄でした。生涯を通して人間としての生き方を示して下さった先生に、深く感謝の意を込めてここに「谷川道雄先生特集」を組みました。

1925年、熊本県水俣市生まれ。京都大学文学部史学科卒、大学院に学びながら、亀岡高校、洛北高校教諭に勤務。その後、名古屋大学教授、京都大学教授を定年退官し、龍谷大学教授、京都大学名誉教授、北京大學、武漢大学、北京師範大学客席教授。

【主任研究員会議】

◇文教研では毎年4月に「主任研究員会議」が開かれ、先生方が一年間のご研究と次年度のご計画などをお話しくださいます。

谷川先生の現代中国農民運動への研究が一段と深まった2012年7月には

「内藤湖南研究会」「東アジアの歴史と現代研究会」共同企画の「現代中国農民運動の意義―前近代史からの考察―」のシンポジウムが開催されました。

谷川先生は、今年(2013/4/15)の会議で、このシンポジウムの学問的意義の発表とレポート報告をされました。

◇レポート報告 谷川道雄



発表する谷川先生

◇レポート報告 谷川道雄

内藤湖南研究会に属する8人のレポーターが、「1過去と現在の対話 2過去と現在とを結ぶ方法的概念―農民生活における自立と依存 3他者依存から自己依存へ」という意図に沿って各自専門の時代について報告を行った。自画自賛であるが、この3つの意図は、従来の個別研究やシンポジウムには

◇研究発表

私は今回のシンポジウム(現代中国農民運

動の意義―前近代史からの考察―)を三つに総括します。

「過去と現在の対話」これは非常に有名なE. H. カリーの言葉ですが、歴史家として、中国史家としてそれをしなげやいけません。現実とは今日の中国の現実から逃避している研究者が多い。だからこういう対話を試みた。中国農民は自分の土地を耕作して、家族労働で自立した生活を送っています。かつてこれは、国家の奴隷でもなければ、農奴でもありません。しかしながら、農民は自分で完全な自立はできない。略奪や自然災害に對して、国家権力や農民の自立を保証する民間の農民以外の有力者に依存しなければ不可能です。自立と依存という論理的に言えば矛盾した構造のもので、農民にとっては他者に依存することで二千数百年も農民たちは生きてきた。これが二つ目です。

そして三番目、現代は過去と違って新しい運動の段階にある。他者依存から自己依存へ。農民の自主的連帯で、新しい農村共同体を作っていくという理想が何らかのカタチで提示されるべきじゃないかと。この三つの要件というものをです。現代の農民運動は含んでいる私は考えるんです。長期的に見て、黄河の自然の流れによって中国の歴史は大きく動いていると思っておるわけです。

非常に短期的に見た場合に、そういう方向へ農民の運動はほとんど展開していったという事になるかという、極めて怪しい二つの原因があります。一つは権力が、農民が世界を自主的に作っていくことを非常に嫌うんですね。どうしても自分たちが干渉する。そういう外からの圧迫。それからもう一つは農民の自覚の足りなさ。農民はやはり自らの利益というものを考える。たとえば、若い農民工が都市のきれいな生活に慣れていく。これは生活の必然から来ているわけで、これを非難する理由はどこにもないわけですが、その中で、非常に精神の荒れ果てた農村の空洞化、空心村が至る所に生まれて農村は壊滅していく。中国の農民が自主的に自分たちの世界を作っていく営みは一体どうなっていくんだろう。農村はいかにあるべきかという論を立てる人が非常に少ない。また、知識人たちがそれを希望していてもちゃんと実証的に調べている事例がない。

そういうことは私自身がこれから苦しい中で勉強していかないといけない、ちょっとつらいですけど、まあ見とってくださいとはよく言いませんが、少しでも勉強して、次の「研究論集」には、何かそういうところをにじませた論文を書いてみようかと思っています。

【研究の礎】

◇塾生のみさんに向け、主任、特別研究員の

研究や近況、研究会の紹介シンポジウムなどの活動、その時々主任研究員や講師が考えたことを「文教研レポート」(2003年、2007年、2012年より)「文教研の葉」に改題して発行してきました。

◇「文教研レポート」 2007/春 より抜粋 「戦後日本から現代中国へ」を讀んで 牧野 剛

今度の著書の中で、「共同体論」史的唯物論の対立する論争に、彼一流の一つの結論をつけようとしたといえるのではないかと。つまり、「客観的」に眺めているだけではすまない現実への切実な問題関心に自身が切り込むことを通して、当然にも一番鋭くその対立を止揚し得たのではないかと。谷川先生が私の考えていることに近い発想の基に、今回のブックレットを著して

いるとしたら、戦後の騒乱とマルクス主義史学の推移、そして現代日本と中国への強い関心、若者へのメッセージの意味が、そしてその目標とされているものが、今回間違ひなくより鮮明なものとなったと言えらるであろう。後進は、中国史をここから始めることができる分、その礎石を手に入れたことになる。

◇谷川先生の「文教研レポート」2008年 春号掲載の「自我と研究人生」は、牧野先生に送ったものといえるでしょう。谷川先生は、魏晉南北朝の豪族たちが持っていた高い倫理観や民衆のために尽くした具体例を見出して発表しますが、当時の唯物論者の研究者たちから大批判を浴びせられます。

◇「自我と研究人生」 谷川道雄 「文教研レポート」2008/春 より抜粋 魏晉南北朝の史書を虚心に、丹念に読み続けた。行く手は霧に包まれていたが、面白い作業だった。史料を抜き書きしたノートが、五冊、六冊と増えて行った。貴族・民衆にかかわらず、当時の人びとの生き方に触れて感動することも少なくなかった。北朝からさらに五胡十六国時代にさかのぼった時には、匈奴とか鮮卑といった非漢族系の人たちに心を通わすこともあった。階級や種族や、その位置は異なっている、同じ人間なのである。こうして歴史の地平がおぼろげながら見えて来たように感じられた。その地平の遠くを見つめて荒野に立っている自分を意識するようになった。以来、約半世紀、いろいろな曲折はあったけれども、

この意識はずっと続いて今日に至っている。魏晉南北朝の史書の錯雑した記事の林の中に、ちょうど埋もれた古代遺跡のように、一つの世界が透けて見える。遊牧系種族が華北で興亡をくりかえし、漢族政権は長江流域に亡命して今の南京を本拠とした。加えて各地には盗賊団の横行・掠奪がある。凶作による極度の食糧不足は、人が人を殺して食うという人倫上の最悪状態さえ現出した。この極限状況を人びとはどう生きたか。この極限状況を人びとはどう生きたか。人間同士が団結するより他に道はないのである。その中心になつて指導したのは、知識と道徳をみがき、資産家でもあるその地方出身の豪族たちであった。彼らはバラバラになりがちな民衆を統合して、地域を防御し、生産を確保することにつとめた。ひどい飢饉のときは、自家備蓄米を放出して窮民を救済した。こうした私欲を捨てた行為は民衆を感動させ、団結力はいよいよ強まった。魏晉南北朝は宗教の時代でもある。儒教の仁義、道教の無私、仏教の慈悲が交り

主任研究員会議2013年4月15日



中川久定先生

渡辺京二先生

谷川道雄先生

あつて、人びとを精神的に支えた。

私はこうした人びとの団結した関係を、一種の共同体社会と考えた。しかし、豪族は民衆を苦しめるものという固定観念をもつ研究者たちにはこの構想が気に入らなかった。それでも私は自説を変えなかつた。歴史学者は自分の主義主張より、史書の記述の方に拠るべきではないのか。といってその事実の中から必然的に導き出される論理を把握しなれば、学問のための学問に終わってしまうだろう。人類が苦難の中を生き抜いてゆくためには、個人の障壁を越えて互いに連帯しなければならぬ。私はその実例を魏晉南北朝時代に見て、そこからこの時代の歴史をえがいた。(中略)

私のなすべきことは、自分の位置を変えないことだ。そして世界が人びとの自覚によつていつの日か変わり、人間の気力を取り戻すのを待つことだ。たとえ人生を終わっても、かなたでそれを守つてほしい。

【谷川先生と渡辺先生】

◇谷川先生と渡辺京二主任研究員は、河合文化教育研究所研究員として同席されるようになり、以来おふたりは親交を深めてこられました。

◇朝日新聞2010/6/17 渡辺京二 壯者を凌ぐ老学究

いわゆる谷川四兄弟のうち、健一、雁、公彦のお三は早くから存じあげていたが、3番目の道雄氏とはなかなか縁がなくて、親しくしていただくようになってから、まだ10年も経たない。

でも、著書は早くから読んでいた。「中国中世社会と共同体」。1976年刊だが、私が読んだのは5、6年の後のことだ。旗田巍氏の著作などで、中国には村落共同体はないというのが定説だと思っていた私は、道雄さんが提出されている豪族共同体なる概念に意表をつかれた。

これは戦乱のうちに続くなか農民たちが豪族を指導者に仰いで創り出した共同体であり、その共同性は、豪族のおそれを律する倫理の高さによつて担保されているのである。

このような共同体の存在を、氏は文献の綿密な読みこみを通して立証する。経済的下部構造すなわち階級対立をもつて豪族・農民の関係をとらえようとする戦後歴史学の手法からすれば、何と異端であることか。しかし、ここにはドグマを去つて、歴史の真実の姿に即こうとする、自由で勇敢な試みがあった。

道雄氏はその後、中国史を官と民の対立という点から、一貫して読み解こうとされて来た。最近、土地を奪われた農民が当局に對して、法と実力の両面で抵抗する動きに注目し、大部の訳書も上梓されている。84歳の老学究が壯者を凌ぐ現実への意欲を示されているのだ。奮励せざるべけんや。

◆「渡辺先生への私信」

谷川先生の中国中世の共同体への関心と、渡辺先生が「たわゆる近代日本における共同体への関心は、事実や事例から歴史を読み解き人間が生きてきた歴史世界を考へていく」というお二人に共通する姿勢です。

谷川先生が「最近の中国農村についていろいろ考えられる興味深い事件が起こりましたのでそれに関する資料をこっそり見たいと思います」と、渡辺先生に私信を送りました。渡辺先生が関わる同人誌『道標』編集部からその通信をぜひ掲載させてほしいという要請を受けた谷川先生はさらに詳しい説明を添付して快諾されました。

◆「道標」2012/夏より抜粋

鳥塚村事件と共同体の復興
この村のコミュニティともいえるべき闘争態勢を組織づけているのが、伝統的な宗族制度であるということ、そしてその闘争のセンターがこの村の廟の建築を模した芝居小屋前の広場であること、この二点に強く魅かれていきます。(中略)

毛沢東はこの宗族組織を根拠にした族権の撲滅を計ったのですが、それは脈々と生き続け、それが今回の土地奪還闘争の組織基盤となったのですから、そしてその原因は共産党の汚職にあるのですから、歴史は本当におもしろいです。私はかつて「階級制度によって辱められた共同体の復興」というようなことを申しましたが(『中国中世社会と共同体』)、その通りになったのですからオドロキです。

谷川道雄先生の主な著書

【単行本】

『唐の太宗』、『隋唐帝国形成史論』、『中国中世社会と共同体』、『世界帝国の形成 後漢一隋・唐』、『中国中世の探求—歴史と人間』、『増補 隋唐帝国形成史論』、『中国史とは私たちに何か—歴史との対話の記録』、『戦後日本から現代中国へ—中国史研究は世界の未来を語り得るか』、『隋唐世界帝国の形成』

【共編著】

『歴史と現代 一九五四年度 歴史学研究会大会報告』共著、『中国中世史研究六朝—隋唐の社会と文化』川勝義雄との共著、『新書東洋史上・下』伊藤道治他共著、『中国民衆叛乱史 I—IV』森正夫との共編、『交感する中世—日本と中国』網野善彦との共著、『戦後日本の中国史論争』編著、『中国中世史研究』編、『東アジア史を問う—「戦後五〇年」を超えて』共著、『社会・文化・思潮—東海の地平から』共著、『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』編著、『内藤湖南の世界 アジア再生の思想』共編著、『歴史の中を人間はどう生きてきたか—私たちの場所から中国中世を見る』共著

【訳文】

『土地を奪われゆく農民たち—中国農村における官民の闘い』王国林著 谷川道雄監修 中田和宏・田村俊郎訳

する記録を紹介し、その広場が彼らの連帯にとって最もふさわしい象徴的地点であった」と位置づけています。(一)宗族の内なる力では、「現代の最も先鋭な闘いにおいて、伝統的な血縁団体である宗族が人びとの連帯を支えていたとは思っても寄れません。しかしその後、中国の学者の農村調査記録を読んで、それがそんなに奇異なことではないことを知りました」と宗族について詳しく論を運びます。

◆「道標」2012/秋より抜粋

鳥塚村事件から連想すること二題

(一)宗族の内なる力
そもそも宗族とは何か。宗族の精神とは何か。まずその根源のところから考えてみれば、宗族組織とはもともと同族に対する救済組織です。なぜ同族を救済するかと言えば、それは同一の祖先から血を分けた間柄だからです。この組織の中にあつて個々人は生きてゆく保証が得られるわけですが、それにはその共通の祖先を祀り、血統を正し、族内の倫理生活を確立しなければなりません。そのために族譜を作つてこれを文字に著し、族田を設けて救済措置(救済、奨学など)を講ずるわけですね。

私がここでよく注目したいのは、族譜についてです。族譜は一族の系譜を載せたものですが、その中には、必ずといってよいほど、族規がつけられています。族規は一族の守るべき規律で、親子・兄弟・夫婦間の倫理は勿論のこと家庭経営のあり方等が明記されています。しかし単に族内のことを述べるだけに止まらず、近隣との和睦を説き、争いを戒める事項が含まれている例が多いことに気づかれます。宗族はたしかに一族の結束した組織ではありますが、地域社会との共存せしめ、基本的な生きてゆくことはできません。血縁は人の存在の由来を示すのですが、人が現実の生きてゆく場は地縁の世界です。個々人は誰でも血縁と地縁(つまり時間と空間)の交叉するところに生きていくわけで、族規を作成した人たちは、このことをよく知っていて、内外の倫理を説いたにちがありません。(中略)

「伝統を単におくれたものと見ず、またそれを近代化に利用し得る手段とのみ見なすのでもなく、その意味を根源に立ち返って考えるという、もう一つの立場があるように思うのですが、いかがでしょうか。この立場に立てば、歴史はずでに経過してしまつた時間ではなく、現代の課題を直接照射してくられる知的体験ということになりましょう。随分回り道をしてしまいました。宗族組織は鳥塚村だけでなく、他の地域でもさまざまに活動していることが、おほろげながら私にも分かってきました。それは一面民衆の日常生活を律する制度ですが、他面では、政治の世界に反応して活動する内なる力でもあります。鳥塚村の臨時村民代表理事会は、その最も戦場的な姿であつたと言えましょう。

最後に一言つけ加えますと、民間の自主組織である宗族は、一方で「自主的に」解体してゆく性質も持っています。春節で帰郷した農民工たちが、村祭に参加しなくなり、みこしを担ぐのは老人と子どもばかりという新聞記事を見ました。毛沢東の権力をもつても根絶できなかった宗族共同体が、市場経済によって内側から溶けてゆくのですね。

◆さらに「道標」2013年春号に、「湖南省衡陽県農民協会のこと—中国農民運動の最先端」とは異なる「孤立しがちな村々の維権分子が連帯して、全県にまたがる組織を作り上げた農民運動の事例でした。その農民協会をまとめたのが彭崇俊という人ですが、その闘いを現在の農民運動の実体の一例として伝えて、引き続き運動を担った人たちの人間像に迫っていききたい、また新たな研究への意欲を語っていらっしゃいます。

◆「道標」2013/春より抜粋

湖南省衡陽県農民協会のこと

衡陽県農民協会は決して自動的に出来上がった組織ではない。減負代表たちが当局の圧迫に抗しつづき必死になつて作り上げた集団である。とすれば、これを構成する一人一人にまで降り立ってその精神構造を理解してゆく必要があるのではなからうか。勿論、一時期三千人を擁するといわれたそのメンバーのすべてを考察することはできない。しかしその発起人中の一部の人びとについては、幸いに于建嶸氏による記録が発表されている。その記録に拠りつつ衡陽県農民協会の領袖たちの人間像に迫ってみたいが、これについては稿を改めなければならぬ。

【中国の研究者との交流】

◆谷川先生が、中国の専門家の中国政法大学社会学院の応星教授と中国北京大学社会学系の前飛舟教授に、評論「現代中国農民維権

◆「研究論集第10集」2012/12より抜粋

特別寄稿 現代中国農民運動の性格をめぐって—中国専門家との交流記録—

応星・周飛舟の両先生は、いずれも私が中国農民の歴史的に一貫した存在様式を自立—依存という図式でとらえたことに対して、全面的な賛意を表明して下さいました。そしてその構想が今日の維権農民運動の意義を考へる上にも有効であるとも評価していただいた。私は自分の拙い考えが、このように両先生の支持を受けたことに対し、限りない激励を感じる。(中略)

私は現代の農民維権運動が農民の他者依存から自己依存へ転換する推進力であると考え、両先生はその原則を認めた上で、しかし実際はそこへ容易に向かい得ない現状があることを教示された。実体に触れることのできない私は、この現状を忠実に受けとめなければならぬ。私が自己依存というのは、農民が互いに連帯して地方政府の不法から自己の権益を守り、その自立生活を確保してゆく体制、ただそれだけのことであるが、それが如何に困難なことであるか、改めて運動の内面を知らされた思いである。

◆中国の両先生からの返事に感激された谷川先生は、ついで「ある無量の感激を禁じ得ない」と大学卒業以来の研究生活を振り返ります。魏晋南北朝・隋唐史の研究から家族共同体論を発表し、自説を堅持してこられたが、中国史の全時代に対して繋がりのかという問題は残りました。現代農民運動を研究する中で、視点が独善に陥つていないかどうかという不安を抱えていた時の、中国の専門家からの賛意でした。

◆これは私の長年の中国史研究の終点ともいべきものである。過去と現在を結びつけてトータルにとらえる視点として私が用いたのは、自立—依存というコンセプトであった。私はこれによってかつての豪族共同体論を今日に生かすことができたという感慨をもつ。まことに細々ながら、過去と現在の内面が結びあつたのである。中国の未来は、この現在の動向がそれを決するであろう。

【教育者としての谷川先生】

◆谷川先生には、中国史研究者としての面ともひとつ教育者としての面がありました。教育者としての一面が特に強いのは、高校教諭を勤めた体験があつたことによると言えます。先生は「わたしは教室では生徒と同じ目線で見ようとしているんですよ。教壇の上から向かい合っているのとは分らない。だから必ず教壇を降りて生徒の後ろに行つて同じ方向から見るんですよ。」とおっしゃっていました。



長野敬先生

丹羽健夫先生

木村敏先生

◆文教研事務局御中

部屋で探しものをしていましたら、今から27年前に、中日新聞に書いた拙文のコピーが出て来ました。教育に対する自分の考えが、約30年、少しも変わっていないのに驚きました。教育とは、その時々の人類共同体の再生産のためにある、という考え方は、現在の我々にとっての人類共同体の課題を自覚し(例えば自然環境の問題、人と人との関係の問題)、各個人がそれに向かつて知を磨いてゆく、ということをお願いしたものです。現代の教育論がともすれば、個人の側(あるいは抽象的な社会)からしか見えないのに対する不満でもあります。教育論だけでなく、学問論に対しても、同じです。

◆中日新聞 1978/1/4より抜粋
教えること学ぶこと 谷川道雄

の原理を創り出すことが果たしてできるかどうか、人類の将来はそこにかかっている。とするならば、現代人が教えることも、決して単なる個人の人格形成という枠にとどまらなければならないであろう。新しい連帯の道を率先して模索する。戦士の育成こそ、教育の根本目標でなければならぬのではないか。

【谷川先生が選んだ図書】

河合文化教育研究所では2010年から推薦図書「わたしが選んだこの一冊」を発行しています。

谷川先生は、無教会主義で非戦論をとなえたキリスト教徒・内村鑑三の著書を2度推薦されました。「代表的日本人」では、本書が英語で書かれたのは、日本人が国でない日本にも、世俗のキリスト教徒などにはるかに及ばない、キリスト教的精神をもつた人物が存在したことを、世界の人びとに知らしめるためであったこと、彼のいうキリスト教的精神とは何か。財産や地位や名声などを省みず、つまり自分一身の利益を捨て、人びとの為に献身的に働いて一生を送つた、その純粋な人間の魂のことである。」と

「後世への最大遺産」と説くのであります。中川裕の「アイヌの物語世界」では、アイヌの人たちにとって、人間を除く自然界はすべて「カムイ」で「人間にない力」をもつたものという意味であり、この両世界は対等の関係であり、これこそまさに「自然との共生」である。今年2013年はカトリック信者・遠藤周作の「イエスの生涯」で、いじめに苦しんで命を絶つた中学生のことに触れ、彼等彼女等にとって、欲しいのは、自分の苦しみを自分と一緒に苦しむ、泣いてくれる人ではないか。そんな人がこの世に存在したら痛ましい選択も避けられたのではないかと—そんな人がこの世に存在した、それがイエスだということである」と紹介しています。こういって本の選択にも谷川先生の、人と人との共生、人と自然との共生という教育観がうかがえます。

◆谷川先生のあくなき研究への情熱と次世代へ託す思いに強く打たれました。長い間本当にありがとうございました。(編集 文教研・東京)

私の近況

渡辺京二



試行錯誤のあとを示すものになってくれるかも知れない。三冊とも、以前の仕事をまとめたものだし、たいして思考に進展がないのはさうでもない。来年出そうと思っている本も何冊かあるが、それもまだ本に収めていなかったものをまとめる性質のもので、何だか死を前にして店じまいの準備をしているようだ。

今年三冊本を出すことになる。一冊はこれまで書き溜めた石牟礼道子論を集めたもの。「もうひとつのこの世」というタイトルで、六月に弦書房から出た。彼女の『天湖』というとても風変わりな小説について、私なりの論を書きおろして収録できたのが何よりだった。

二冊目は熊本大学その他で行った講演五本を取ったもので、「平凡社新書」の一冊として十月に出る予定だ。熊大で頼まれたのが「近代再考」といったテーマだったし、大体その線にそって話を集めたので、それにふさうタイトルを平凡社の方で考えてくれることになっている。新書を書いてくれと頼まれてもう何年も経っている。やっと約束が果たされた。

三冊目は『万象の訪れ』というタイトルの短文集で、弦書房からこれも十月に出ることになっている。一九六〇年代からいろんな場を書いて、まだ本に収めていなかった短文を取り揃えた。いくらか私の「注記」『平凡社新書の拙著は「近代の呪い」というタイトルで刊行された。』

渡辺京二(わたなへ けいじ) 文教研主任研究員。法政大学社会学部卒。日本近代思想史家。思想家、評論家。あり得なまじりの日本近代を背景にした独自の視点から日本近代論、近代思想史家論で著名。一貫して在野の研究者として生きる。著書『明治の海』の海外文献を精査して著した「近き世の面影」が、近代以前の日本のイメージを一新させたという事で多大な衝撃を世に与えたのは記憶に新しい。1999年度第12回和辻哲郎文化賞受賞。

●プロフィール
渡辺京二(わたなへ けいじ) 文教研主任研究員。法政大学社会学部卒。日本近代思想史家。思想家、評論家。あり得なまじりの日本近代を背景にした独自の視点から日本近代論、近代思想史家論で著名。一貫して在野の研究者として生きる。著書『明治の海』の海外文献を精査して著した「近き世の面影」が、近代以前の日本のイメージを一新させたという事で多大な衝撃を世に与えたのは記憶に新しい。1999年度第12回和辻哲郎文化賞受賞。

中川久定

私にも「年貢の納め時」が近づいている。小学校一年生の頃、大人になったら何になりたいか、と父に聞かれた。私は即座に、「天文学者になりたい」と答えた。原田光夫の2冊の本、すなわち『子供の天文学』と『子供に聞かせる科学の話』(恒文社)を読んだからだった。私は天文学者にはならず、フランス思想史の研究者にはなった。大学一年生の時、私はフランス文学志望の学生数人とよく集まり、ガリ版刷りの同人雑誌『季節』を出すことになった。1950年11月発行の第1号には私の「ある季節の風景」という一文が掲載されている。終始、凄みをきかせた文章の中には、当時の私の内面の空虚さ、あるいは自信のなさが如実に表現されている。ただし、私がそこに引用しているアランのデカルトに関する一句だけは、今もそのまま私のなかに生きている。「けだし我々のうちには唯一の精神しかなく、またこの精神は自己の中に相異なる諸部分をもつものではない。感覚的な精神が同時に理性的なものであり、すべてその欲望は意志なのである」と。私はその後、これまで、アランのこの言葉のように生きてきた、という事実は今、はっきりと気づかされている。フランス18世紀後半の思想史という狭い分野でしか、私はこれまで仕事をしこなかったが、その研究をまとめた1冊の本『啓蒙の精神 フランスと日本』の中に、私は私自身のすべての感覚性、理性、欲望の三者を投げ入れている。そこで問われているもの、それは当時の知識人たちの実存である。18世紀後半のフランス。神への信仰を擁護するカトリック教徒、それと対抗して、宗教的義務感に近い感情をこめて、それぞれ自らの反宗教的立場を固守する無神論者と理論者たち。賭けら

れるものは、両者それぞれに固有の実存であり、私に問われるものもまた、私の感覚と理性と意志、すなわち大学入学以来絶えず私に問われ続けてきた、私自身の実存、すなわち私の全存在にほかならない。

●プロフィール 中川久定 (なががわ ひさやす)



文教研主任研究員。京都大学文学部仏文学科卒。専攻・フランス文学史・思想史。文学博士。京都大学名誉教授。日本学士院会員。元京都国立博物館館長。元国際高等研究所副所長。元国際18世紀学会副会長。国際18世紀研究センター学術委員(フランス、フェルネ=ヴォルテール)。研究誌「ディドロ」百科全書研究(フランス)査読委員、研究誌「ディドロ研究」(カナダ)評議会議員。

18世紀フランス文学・思想の実証的比較分析を行っている。1976年辰野賞(日本フランス語フランス文学会)、1986年ハルム・アカデミック勲章オフィシエ級(フランス)、1993年京都新聞文化賞、2001年勲2等瑞宝章、2004年レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ級(フランス)、2007年京都府文化賞特別功労賞受賞。著書:『啓蒙の精神 フランスと日本』『ディドロのセネカ論』『自伝の文学』『啓蒙の世紀の光のもとで』『転倒の島』『Des Lumières et du comparatisme』、『Introduction à la culture japonaise: Essais d'anthropologie réciproque』(フランス語原著に基づくスペイン語版、イタリア語版、ポルトガル語版あり)。『L'image de l'autre vue d'Asie et d'Europe』(éd.par H.Nakagawa et J.Schlobach)。『Mémoires d'un moraliste passable』。S・カルブ編中川久定/増田真監訳『十八世紀研究者の仕事 知的自伝』。河合文化教育研究所から「ディドロの(現代性)」。河合ブクレット)。J・シュローバハ氏との共同編著で18世紀国際シンポジウム論集の日本語訳『18世紀における他者のイメージ』を刊行。

主任・特別研究員の近況

長野 敬

二つの基準



以下の記述は、最近のある研究会で持ち出された問題を発端としている。(ただし元来の焦点は、差別という人間社会での現象にあり、突っ込んだ議論は別の機会に譲る)。

福島原子炉の事故は、いま日本でもっとも深刻、かつ複雑な事態である。指摘の一つとして、周辺に放出された放射性物質の影響(以下、放射能と略称)が容易に回収されず残留して、後継世代に影響を及ぼすことが危惧されている。これは言ってみれば当然のことで、そもそも遺伝子の本体がまだ五里霧中だった時期に、ハーマン・マラーはショウジョウバエへのX線照射実験から、動物への放射能の悪影響を説き、1946年にノーベル賞を得た。人間も動物の仲間だから、放射能による障害児誕生は当然予想される。ところが福島原発反対を訴えながら、次世代への影響を反対の根拠としたがらない立場がある。それを根拠とすると、生まれる子を障害の有無で差別することになるからである。

この立場はじつは放射能の問題に限らない(むしろ先天的なハンデキャップにどう対応するかという、社会システムの設定の問題である)。たとえば21番染色体が通常の二本でなく三本であるトリソミー(ダウン症)のような軽度~中程度のハンデキャップについては、患者関連の団体も積極的に立場を主張している。国連は3月21日(染色体の「3重化」と21番染色体にちなむ)を2012年からダウン症の国際デーに設定し、障害を差別の根拠にしない姿勢を明確にした。

ハエと同じく人間も、攪乱的な環境などの影響は同じように受けるだろう。そこに二重の基準などはない。しかし影響を受けた個体が不利を蒙る程度は、人間の社会システムでは他の動物の場合と明らかに違う。違いの根拠である広義の共感(sympathy)は、類人猿の遠い祖先から受け継いできたのかもしれないが、宇宙の摂理とか真理が進化を通して必然的に人類に流れ込んできたのではない。望ましい約束ごととして人類社会が自分の社会に仕掛け、定着させた人工基準である。生物学の立場からこのことだけ一言しておこう。

たもの強固さというものが、私の中にある名状しがたい感覚として残った。記述された歴史の背後には、自明なことながら、人々が生き延びるために目を見えないかと思える。かと思える。

●プロフィール 長野 敬 (ながの けい)

文教研主任研究員。東京大学理学部植物学科卒。専攻・生物学。医学博士。自治医科大学名誉教授。細胞膜のイオン輸送酵素の遺伝子構造を決定し世界の遺伝子研究に先鞭をつける。細胞から生態系まで生物学を系統的観点から統一的に見る独自の的方法論をとる。現在はこの方法論の延長上で「生命研究を教育の中で多面的に正しく理解させる」ことをテーマに研究中。著書:『生物学の旗手たち』『科学的方法とは何か』『変容する生物学』『進化論のらせん階段』『生体の調節』『生命の起源論』『生命現象と調節』『細胞のしくみ』『ウィルスのしくみと不思議』、他に共著、翻訳書など多数。

私が考えてきたこと

牧野 剛



私は、子どものときから長らく文学史や民俗学に興味を持ってきた。そして秘かに、歴史と民俗学の合体のようなものを、自分の一生の研究の対象にしようと思ってきた。それにはいくつもの理由がある。

その一つに、小学校に入る前に幼い私に祖母が何度も繰り返して聞かせた話がある。この話が私の内面に一つの核を形成し、小学校時代には安田徳太郎の本(「わたしは選んだこの一冊」2013年版参照)を読んだことになった。今度はその安田徳太郎の影響で、その後のおびただしい読書の中に柳田国男や宮本常一などの民俗学を讀むという一つの筋ができていった。さらにそこに、学生になってからのさまざまな師との個人的な関係(中川久定氏・故谷川道雄氏・故廣松渉氏・故網野善彦氏など)と若き日の学生運動が、この歴史と民俗学

の合体のうちに物事をみる、あるいは歴史の背後に常に生きた人間の生活を捉えようとする私の傾向を決定づけていった。ここでは、祖母の話について書こう。子どものとき、毎日、駅で汽車を何時間も眺めながら祖母から同じ話を何回も聞いた。それは祖母が実際に目撃したものでなく、彼女の母やその祖母の直接の目撃談として「彼女が伝えたもの」であった。明治維新の前、大井の宿(注1)に、数百人の水戸の浪士が命からがら逃げ込んできたので、憐れんだ大井の宿の人々が彼らに食いや水を与えて休ませた。しかし彼らはそこに長く留まることがなく、最後にはアルプスを越えてどこかへ去って行ったという学歴も知識もない祖母たちは、彼らを「井伊大老」を切った水戸の浪士たちだと信じていて、伝え聞いた細かいエピソードを交えながら私に何度も話すのであった。しかし、長じて、私はそれが桜田門外の変(1860年)より4年あとの「水戸天狗党」の反乱者の浪士であることに思い至った。それで歴史の本や絵巻を祖母に見せて彼らは「水戸天狗党の乱」の浪士たちであり、水戸から中山道を下って来て、最後には敦賀で処刑された(死罪32人、鳥流し17人、水戸藩渡り130人)ことを示し、この北陸(注2)で数百人(女性も数人いた)を越える処刑事件の大きさからして、桜田門外の変を引き起こした水戸浪士の二十数人ではないことを何度も説明した。しかし、祖母はついに納得しなかった。おそらく無学の祖母は、本の知識による私の整合的な説明よりも、自分が実際に伝えたという経験の深さを信じたのだと思う。この庶民の中に根付い

たものの強固さというものが、私の中にある名状しがたい感覚として残った。記述された歴史の背後には、自明なことながら、人々が生き延びるために目を見えないかと思える。かと思える。

●プロフィール
牧野 剛(まきの つよし) 文教研特別研究員。名古屋大学文学部国史科卒業。私塾、養護学校教諭、高等学校教諭などさまざまな教育現場を経て、1976年より河合塾国語科専任講師として予備校の教壇に立つ。元国語科、小論文科主任。1984年の「全国共通一次試験」の小論文問題(藤田省三「精神史の考察」をベースにしたもの)で、大きな話題になる。その後、東大、京大の学生運動・市民運動の中心を担い、社会の矛盾を問いつつにわたって多くの予備校生、高校生に絶大な支持を得てきた。文教研および大阪校、福岡校、仙台校などを発案し、河合塾の全国体制の基礎作りに関与。その全国展開に伴って、全国模試の体制、ペーシック(低学力)コース、コスモ(大検)コース、サテライト(衛星)授業の設立なども提案、実現してきた。また、日・韓三国大学入試統一テスト比較、カンボジア学校支援も行ってきた。著書:『予備校にあり』(偏差価値観)ほか多数。